

幼児の「心の理論」の発達ときょうだい数 及び母親の養育態度との関係

— 中・日比較調査 —

許 佳 美

Development of “Theory of Mind,” Number of Siblings,
and Mothers’ Attitudes towards Child Rearing in China and Japan

Kyo Yoshimi

問 題

中国では、伝統的な「多子多福」の考え方や、1950年代以降の労働力確保を目的とした政府の多産奨励政策により人口が急増し、食糧問題をはじめとするさまざまな問題が生じてきた。そこで、1978年に人口政策が大きく転換され、「晩婚晩育」と「少生優育」のスローガンの下で「一人っ子」政策が導入されるに至った（莫，1992；若林，1994）。現在まで、一部の農村部や少数民族を除く中国人は、国の「一人っ子」政策によって夫婦の間に一人の子どものしか持つことができず、地方行政当局の管理下で計画出産を行ってきた。

多くの親たちは、一方では過剰人口の回避策としての「一人っ子」政策の必要性を認めるが、他方ではたった一人しか子どもを持っていないために、わが子を宝物のように扱い、子どもに物質的に不自由を感じさせないように家族全員でその子を見守り、子どもの欲望を満足させようとする（許，1995）。その結果、一人っ子は欲しいものを望み通りに買い与えられるなど、過保護に育てられやすい。このような過保護な状態の中で育てられた子どもは、時に「小皇帝」とも呼ばれ、わがままで、思いやりがない。この状況から、近年「他者の心が理解できない人間に育つのではないか」という不安が中国の社会の中で高まってきている。このような中国の「一人っ子」政策の実施とその心理・社会的影響については、中国の国内だけでなく、諸外国の研究者の関心を集めてきた。

一般的な見方として、一人っ子の子どもは知的な発達は優れているものの、社会的な発達はそれほどではなく、他の子どもたちより甘やかされ、わがままかつ非協力的で、独立心に乏しいということになっている（荊，1989）。Jiao, Ji & Jing (1986) は一人っ子と非一人っ子の子どもに独立思考、持続性、行動統制、欲求不満傾向、協力、仲間の威信、自己中心性の7つの面で同級生を評定させる研究を行なった。その結果、一人っ子の子どもは非協力的で、行動統制を欠き、

自己中心性と欲求不満傾向が強いという評価を同級生から得ていることが明らかにされた。

他方、これとは全く逆の結果を得ている研究もある。Chen (1985) の研究では一人っ子と非一人っ子の子どもにおいて、先生、親、仲間からの評価は差がなく、一人っ子の子どもも望ましい集団適応性を持つことが明らかになった。Falbo & Poston (1993) は、中国の都市と農村の小学生を被験児として調査を行なった結果、学校成績においては一人っ子の方がやや優れ、人格属性には差が見られず、身体的成長にも大きな差が見られないという結果が得られた。

一人っ子の家庭が子どもの養育上直ちに問題であるというわけではないが、一人しかいない子どもへの過剰な期待、その結果としての親の過保護な養育態度が子どもの心理的発達にマイナスの影響を与えることは十分考えられる。

子どもの心理的発達をとらえるためには様々な観点があるが、本研究では Premack & Woodruff (1978) によって最初に概念が提唱され、Wimmer & Perner (1983) によって具体的な研究が進展した「心の理論」の発達を幼児期の中心にある発達課題と考えることにする。Wimmer & Perner (1983) は、「誤った信念」課題を用いた一連の研究によって、表象的な心の理解は子どもが4歳になってから可能であるとの結論に達した。ここで、誤った信念課題とは、物語の登場人物が物Xを位置Aに置いて出ていくが、留守中にその物が位置Bに移されるという話を子どもに聞かせ、登場人物が戻ってきた時にXをどこに探すかを尋ねる形式をとる。この課題に正しく答えるためには、子どもは「状況が変わっても他者の信念が変化しない場合がある」ことを理解しなければならない。また、この課題のヴァリエーションである「スマーティ」課題 (Perner, Leekam & Wimmer, 1987) では、スマーティというチョコレート菓子の箱を子どもに示し、中に何があるかを答えさせるのであるが、多くの子どもの予想とは反して箱からは鉛筆が出てくる。この後、その子どもの親しいある子どもの名前を上げ、その子がこの箱を見て何が入っていると思うかを答えさせる。これらの2つの課題に正しく答えるためには、子どもは、同一の外的な事象について、自己と他者の異なった2つの心的モデルを同時に保持しうることを理解する必要がある (Hogrefe, Wimmer & Perner, 1986)。

最近、Perner, Ruffman & Leekam (1994) は、きょうだいとの相互作用が子どもの「心の理論」の発達を促すという仮説の下で、きょうだい数と「心の理論」の発達の間を見つめる研究を行なった。Pernerらは、イギリスの3～5歳児を被験者として、きょうだいを持つ子どもがきょうだいを持たない子どもより誤った信念課題での成績が良く、2人以上きょうだいを持つ子どもと一人っ子の子どもとの間に、誤った信念課題の成績において1年の発達差があるという結果を得ている。

以上のように、Pernerらは「心の理論」の発達がきょうだいの有無に関係するというきょうだい間感染説を主張する (1994)。本研究では、人為的な一人っ子政策をとる中国の一人っ子と、日本の一人っ子及び非一人っ子を比較することによって、一人っ子の「心の理論」の発達がPernerらの仮説の通りかどうかを検証する。

また、従来の発達的研究では、子どもの心理的発達に及ぼす要因として、むしろ親子関係の影響が大きいとされる (東・柏木・ヘス, 1981)。とりわけ、乳幼児期には、親の養育態度の要因が最も重要であるとされる。中国の場合には、多くの子どもが一人っ子のため家庭の中では大人の一方的な世話を受け、他の人に配慮を払うことが少ないと思われる。このような環境の中で育

てられた子どもは、どのようにして他者の心を理解することができるだろうか。もし Jiao, Ji & Jing (1986) の研究結果が正しければ、中国の一人っ子の子どもは自己中心で協調性を欠き、他者の心の理解が遅れることになる。

本研究は中国と日本両国の子どもを対象に「心の理論」の課題3問を実施し、その成績において差があるか、その結果を Perner らの「きょうだい間感染説」及び Jenkins & Astingtonら (1996) の「きょうだい相互作用説」と照らし合わせて検討する。また、質問紙調査法で調べた子どもの発達、親の養育態度に関して両国の間で差が見られるか、被験児が「心の理論」課題の3問で得た成績と母親の養育態度の間に関連があるかを検討する。

本研究において、以下の仮説の下で検討を行う。

〔仮説1〕 Perner, Ruffman & Leekam (1994) の「きょうだい間感染説」が正しいとすれば、中国の一人っ子の子どもは、日本の非一人っ子の子どもよりも「心の理論」の2つの課題の成績が悪く、日本の一人っ子の子どもと同程度の成績が得られるだろう。

〔仮説2〕 中国の親は、子どもが一人っ子であるがゆえに、子どもの数が多い日本の親よりもより育児のことをより意識する（育児熱心、あるいはそれが高じて過保護になる）が、日本の一人っ子の親とは養育態度に差がないだろう。

〔仮説3〕 親の養育態度が子どもの「心の理論」の発達に直接大きな影響を与えるとすれば、きょうだいの数に関わりなく、「心の理論」の成績と親の養育態度の間に直接関連性が見られるだろう。特に、親の過保護な養育態度は子どもの「心の理論」の発達を妨げるであろう。

方 法

被験者 中国側は上海市の幼稚園児56人及びその母親を調査対象とした。日本側は兵庫県内の市立保育所の子ども76人及びその母親を対象とした。調査対象を母親に限定した理由は日本では今でも育児に多く関わるのは母親であることからである。また、日本では保育所に限定するのは幼稚園児の母親の多くは仕事を持たず、一方、中国の母親のほとんどが仕事を持っているため、中・日両国において母親の就労状況ができるだけ近似状態にあることを考慮したからである。ただし、被験児のうち発達に遅れが見られた子どもと課題への参加を嫌がり実験ができなかった子どもは中国と日本それぞれ2人と4人で、以後のデータ分析から除外した。実際に参加した126人の子どもの内訳を Table 1 に示す。

Table 1 実験に参加した被験児の内訳

被験児群	年 中		年 長		合計
	人数	平均年齢	人数	平均年齢	
中国(一人っ子)	29	5;3 (4:10-5:9)	25	6;4 (5:9-6:9)	54
日本(一人っ子)	5	4;8 (4:6-5:2)	19	6;1 (5:7-6:7)	24
(二人きょうだい)	10	5;0 (4:7-5:4)	28	6;1 (5:6-6:7)	38
(三人きょうだい以上)	3	5;1 (4:6-5:5)	7	6;1 (5:8-6:6)	10
日本全体	18	5;0 (4:6-5:5)	54	6;1 (5:6-6:7)	72

手 続 本研究は子どもに対して幼稚園または保育所で個別に実施した実験（誤った信念課題

2問、及び自己信念変化課題1問)と、その子どもたちの母親に対する質問紙調査の2種類からなる。実験では、先行研究の中で多く使われている人形劇(例えば、Wimmer & Perner, 1983)を用いて課題調査を実施した。実験者は、中国生まれで日本に7年在住しており、中国及び日本の両調査を担当し、人形劇での課題の実施と、結果の記録の両方を一人で担当した。中国で実験を実施した際、「心の理論」課題及び質問紙の内容はすべて日本語版からの翻訳とした。最初に、日本語版を作成し、それを翻訳して中国語版を作成した。中国語版作成に際しては、日本に在住する中国人留学生3人が翻訳にあたり、その内の2人が日本語版から中国語に訳し、残る1人(日本語版があることを知らせない)はその中国語版から日本語に訳すことを分担した。この両方をつきあわせて、翻訳による意味の食い違いをできるだけなくすようにした。

1. 誤った信念課題1

本実験は課題を人形劇で実施し、位置変化条件(物を入れる「位置」が変化する条件)で行なった。登場人物は緑色の服を着て、緑色の帽子を被った男の子(太郎)の人形と、赤の服を着て、赤の帽子を被った女の子(かなちゃん)の人形であり、どちらも被験児にとって親しみを感じる人形である。実験者と被験児は対面して座り、真ん中に小さい机が置かれている。実験材料は、色と大きさが見かけの上で明確に異なる筆箱2個、鉛筆1本、紙1枚であった。

実験者はその年齢の子どもが分かりやすい口調で、人形を使いながらお芝居をしてストーリーを全部説明する。ストーリーのおおよその展開は以下の通りである。太郎はお絵描きをした後、鉛筆を大きい筆箱になおし、外に遊びに出ていった。太郎がいない時にかなちゃんが入ってきて、鉛筆を探し、使った後別の小さい筆箱の中に入れて出ていった。太郎がもう一度お絵描きをしたくなって、部屋に戻ってきた。そこで、実験者が太郎がこの部屋に戻ってきて鉛筆を探すだろうことを述べ、次の(1)信念質問：太郎が鉛筆を捜すのはどこでしょうか。(2)現実質問：鉛筆は本当はどこにありますか。(3)記憶質問：太郎は最初鉛筆をどの筆箱の中に入れて出て行ったのですかの質問を被験児に行なった。質問の順序は、(1)～(3)の固定順序で行なった。

2. 誤った信念課題2

この課題のストーリーはPerner, Ruffman & Leekam (1994)の課題を参照し作成したものである。誤った信念課題1と同じように課題2も物を入れる位置が変化する条件で行った。課題の中で使う道具はPerner, Ruffman & Leekam (1994)はチョコレートにしたが、本実験では中国と日本のそれぞれの事情を考慮して、中国ではお菓子のポテトチップス、日本ではお菓子のポッキーを選んだ。また、Wimmer & Pernerの研究ではチョコレートは一つの食器棚から別の食器棚に移されたというストーリーであった。しかし、ものを入れる場所は同種のものであるため、子どもにとって混乱を起しやすことがある。本実験ではお菓子を入れる場所を食器棚とテーブルの上に変更した。ストーリーの展開は以下のとおりである。

テーブルと食器棚のある台所に太郎とお母さんがいる。太郎のお母さんは買い物して帰ってきたばかり。太郎はお母さんが太郎の大好きなお菓子ポッキーを買い物袋から出したところを見て、たいへん喜んで、お母さんに「ポッキーをこのテーブルの上においてね、外で遊んで帰ってきてから食べる」と言って、出ていった。太郎のいない時に、お母さんがテーブルを片付けて、ポッキーを食器棚の中に入れた。太郎は外で遊んでお腹がすいてきて、ポッキーを欲しくなって家に帰りたくなった。そこで、被験児に次の(1)信念質問：太郎はポッキーがどこにあると思っていま

すか。(2)現実質問：今ポッキーはどこにありますか。(3)記憶質問：最初太郎はポッキーをどこに置いて出ていったのでしょうかの順に質問する。

3. 自己信念変化課題

オリジナルのスマーティ課題 (Perner, Leekam & Wimmer, 1987) では、チョコレート菓子の入った「スマーティ」の筒から予期せぬ鉛筆が出てくる設定であるが、本実験では中国人の子どもにとっての親しみやすさを考慮してチョコレート菓子を避け、筆箱からおもちゃのフォークが出てくる内容に変更し、課題名も「自己信念変化課題」とした。この課題の実施手順は次の通りであった。

実験者が被験児に筆箱を見せ、「これは何ですか」と聞く。これに対し、ほぼ全員の被験児が「筆箱」と答えた。答えられない被験児には、実験者が筆箱であることを教えた。その後、筆箱を軽く音を立てて振り、「中に何が入っていると思いますか」と聞く。次いで、箱の中身を見せ、大方の子どもの予想に反して、中にフォークが入っていることを認めさせる。さらに、この実験にまだ参加していない被験児と同じクラスの子どもの名前を上げ、その子の信念を被験者に聞く。その後、箱の実際の中身と、最初に何が入っていると言ったかを確認する質問をする。この課題では次の(1)自己信念質問：この箱の中に何が入っていると思いますか。(2)他者信念質問：〇〇ちゃん(くん)はこの箱を見て、この中に何が入っていると言うのでしょうか。(3)現実質問：この箱に本当は何が入っていますか。(4)記憶質問：この箱を最初に見せたとき、あなたは何が入っていると言いましたかの4つの質問を被験児に順次与えた。

以上の3課題の実施においては同質のものを引き離すため、不完全カウンターバランスをとった。つまり、「誤った信念」の2課題を1番目か3番目に、「自己信念変化」の1課題を2番目にする。

4. 質問紙調査

実験に参加した子どもの母親に質問紙調査を実施した。この質問紙調査は、「フェイスシート」10項目、「子どもの発達」を問う質問13項目(三宅, 1991参照)、「母親の養育態度」を問う質問20項目(大日向, 1988参照)から構成された。フェイスシートの内容は、子どもの性別、生年月日、家計全体のなかでその子どもにかかる費用の割合、きょうだい数、普段子どもとよく関わっている人、記入者などを含む。「子どもの発達」は子どもの社会性の発達、自立心の発達などを問う。「母親の養育態度」は子ども中心主義、過保護、育児以外の価値志向などを問う。フェイスシートを除く質問項目は、「全く当てはまらない」の1点から、「あまり当てはまらない」、「大体当てはまる」と「よく当てはまる」までの4段階評定とした。質問紙は中国側は幼稚園、日本側は保育所の先生と保母さんにそれぞれお願いして子どもの親に配布し、翌日から一週間をかけて回収してもらった。

結 果

1. 「心の理論」発達の実態

誤った信念課題の2問と自己信念変化課題の1問の正答率の結果を Table 2.1 に示す(以下、表の中で誤った信念課題1は「誤1」、誤った信念課題2は「誤2」、自己信念変化課題は「自己」

許：幼児の「心の理論」の発達ときょうだい数及び母親の養育態度との関係

で表示する)。 χ^2 検定により被験児群間の正答率の差を検定したところ、年中児群においても、年長児群においても、中国（全員一人っ子）と日本のきょうだい数による3群（一人っ子、二人きょうだい、三人きょうだい以上）の間に、誤った信念課題の2問、及び自己信念変化課題の1問でいずれも有意差は見出されなかった〔年中児群：「誤った信念1」、 $\chi^2(3) = 2.01$, n.s., 「誤った信念2」、 $\chi^2(3) = 2.63$, n.s., 「自己信念変化」、 $\chi^2(3) = 0.68$, n.s., 年長児群：「誤った信念1」、 $\chi^2(3) = 5.55$, n.s., 「誤った信念2」、 $\chi^2(3) = 1.60$, n.s., 「自己信念変化」、 $\chi^2(3) = 5.44$, n.s.〕。すなわち、「きょうだい間感染説」は認められなかった。

Table 2.1 「心の理論」課題3問での正答率の結果 (%)

被験児	年 中			年 長		
	誤1	誤2	自己	誤1	誤2	自己
中国（一人っ子）	41.4	51.7	37.9	80.0	88.0	84.0
日本（一人っ子）	20.0	20.0	20.0	57.9	78.9	68.4
（二人きょうだい）	20.0	50.0	40.0	50.0	75.0	57.1
（三人以上）	33.3	33.3	33.3	71.4	85.7	85.7

課題ごとの年齢差を調べたところ、中国では年中児群と年長児群の間に差が見られた〔「誤った信念1」、 $\chi^2(1) = 6.77$, $p < .01$, 「誤った信念2」、 $\chi^2(1) = 6.59$, $p < .05$, 「自己信念変化」、 $\chi^2(1) = 9.97$, $p < .01$ 〕。ところが、このような年齢に伴う「心の理論」の理解への発達差は日本の年中児群と年長児群の間には見られなかった〔「誤った信念1」、 $\chi^2(1) = 2.31$, n.s., 「誤った信念2」、 $\chi^2(1) = 2.20$, n.s., 「自己信念変化」、 $\chi^2(1) = 1.36$, n.s.〕。

年齢ごとの課題差に関して、中・日両国の年中児、年長児群の「心の理論」3課題の正答率による課題間の差をそれぞれコクランのQ検定で調べた結果、日本の年長児群にのみ課題による差が見られた〔 $Q(2) = 7.03$, $p < .05$ 〕。多重比較の結果、誤った信念課題2が誤った信念課題1より成績が良いことが分かった。

「心の理論」課題の3問について中・日それぞれの正答人数とその比率を Table 2.2 に示す。

Table 2.2 「心の理論」課題の3問についての正答人数とその比率

被験児	3問全部正解	2問正解	1問正解	全部不正解
中国	22人 (40.7%)	13人 (24.1%)	9人 (16.7%)	10人 (18.5%)
日本	25人 (34.7%)	16人 (22.2%)	20人 (27.8%)	11人 (15.3%)

3課題のそれぞれの正答と誤答のパターンの分析結果を Table 2.3, 2.4 に示す。

3課題の関係を χ^2 検定した結果、中国の被験児においては、誤った信念課題2が誤った信念課題1と自己信念変化課題の理解に先行するが〔「誤った信念2」と「誤った信念1」の間 $\chi^2(1) = 7.44$, $p < .01$, 「誤った信念2」と「自己信念変化」の間 $\chi^2(1) = 11.05$, $p < .01$ 〕, 日本の被験児においては、誤った信念課題2から誤った信念課題1へ、そして自己信念変化課題への理解という順序になっていることが示唆された〔「誤った信念2」と「誤った信念1」の間 $\chi^2(1) = 6.79$, $p < .01$, 「誤った信念2」と「自己信念変化」の間 $\chi^2(1) = 6.75$, $p < .01$, 「誤った信念1」と「自己信念変化」の間 $\chi^2(1) = 8.57$, $p < .01$ 〕。

本研究は被験児の「心の理論」課題の成績ときょうだい数との関係を調べる以外に、被験児の「心の理論」課題の成績と母親の養育態度との関係を調べることも目的の一つである。それは子どもの「心の理論」課題で得た成績と、母親の質問紙における養育態度について評定値とを対応

Table 2.3 中国の被験児の「心の理論」課題の3問での正答と誤答のパターン

課 題			被 験 児 (54人)		
誤1	誤2	自己	年中	年長	合計
正答	正答	正答	5	17	22
正答	正答	誤答	4	1	5
正答	誤答	正答	1	1	2
正答	誤答	誤答	2	1	3
誤答	正答	正答	3	3	6
誤答	誤答	正答	2	0	2
誤答	正答	誤答	3	1	4
誤答	誤答	誤答	9	1	10

Table 2.4 日本の被験児の「心の理論」課題の3問での正答と誤答のパターン

課 題			被 験 児 (72人)		
誤1	誤2	自己	年中	年長	合計
正答	正答	正答	2	23	25
正答	正答	誤答	1	4	5
正答	誤答	正答	0	1	1
正答	誤答	誤答	1	2	3
誤答	正答	正答	2	8	10
誤答	誤答	正答	2	3	5
誤答	正答	誤答	2	10	12
誤答	誤答	誤答	8	3	11

させて調査する。ところが、質問紙の回収率は中国では9割未満で、日本では7割未満であったため、母親の養育態度との関係を見るには、データとして使えるのは被験児全体の126人から97人に減った。そこで、母親から質問紙の回収ができた97人（中国47人、日本50人）の被験児の「心の理論」課題の成績を分析し、その成績ときょうだい数の関係を検討した。その結果、中国の年中児群と日本のきょうだい数による年中児の3群の間に有意な差はなかった〔「誤った信念1」, $\chi^2(3) = 4.33$, n.s., 「誤った信念2」, $\chi^2(3) = 0.91$, n.s., 「自己信念変化」, $\chi^2(3) = 0.61$, n.s.〕。年長児群においても有意差が見られなかった〔「誤った信念1」, $\chi^2(3) = 4.03$, n.s., 「誤った信念2」, $\chi^2(3) = 0.95$, n.s., 「自己信念変化」, $\chi^2(3) = 2.30$, n.s.〕。

以下母親の養育態度、そして、母親の養育態度と子どもの「心の理論」の発達の間を調べる場合、すべてこの97人分のデータを分析データとする。

2. 中・日両国の母親の養育態度の比較

質問紙の「子どもの発達」に関する13項目と「母親の養育態度」に関する20項目のそれぞれについて、中国と日本のそれぞれごとに因子分析（主因子法、ヴァリマックス回転）を行なった。その結果、両国共に「子どもの発達」は3因子、「親の養育態度」は4因子に分かれた。中国と日本では「子どもの発達」及び「親の養育態度」の両方で因子構造がかなり異なるため（紙面の都合で表は省略）、因子分析により尺度を構成して両国の結果を比較するのは困難である。従って、それぞれの元の項目の段階に戻って分析することにした。

子どもの発達 本研究において、年中児群では「子どもの発達」の項目の中に、「親と一緒に出かけるとき、いつも親と手をつないでいる」、「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」、「絵本を読んでほしいとせがむ」、「ほかの人が悲しんだり、苦しんだりしているのを見ると、気にかけて、同情したりする」と「あれ、なに」などと聞いたり、指差したりするなど、知らないものやめずらしいものに興味や好奇心を示す」の評定平均値のすべてが中国の方が日本より有意に高かった（Table 3.1）。

許：幼児の「心の理論」の発達ときょうだい数及び母親の養育態度との関係

Table 3.1 年中児群の質問紙項目の評定平均値（標準偏差）と群差の検定

質問項目	中国	日本	F値	有意水準
子どもの発達				
4. 親と一緒に出かけるとき、いつも親と手をつないでいる	2.92 (0.80)	2.15 (0.55)	8.33	**
7. 親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む	3.04 (0.96)	2.15 (0.69)	8.42	**
8. 絵本を読んでほしいとせがむ	3.35 (0.80)	2.62 (0.77)	7.02	**
10. 他の人が悲しんだり、苦しんだりしているのを見ると、気にかけて、同情したりする	3.60 (0.58)	3.15 (0.80)	3.85	*
11. 「あれ、なに」などと聞いたり、指差したりするなど、知らないものやめずらしいものに興味や好奇心を示す	3.73 (0.60)	2.85 (0.55)	18.68	***
親の養育態度				
11. 家ではいつも数や文字などを子どもに教えている	2.88 (0.71)	1.92 (0.76)	14.34	***
13. 夫と一緒に子育てをしてくれている	3.60 (0.65)	2.50 (0.67)	23.07	***
14. 育児に自信がなくなる	1.35 (0.69)	1.92 (0.28)	7.78	**
16. 自分の関心や時間を子どもにとられて視野が狭くなる	1.72 (0.79)	2.23 (0.60)	3.99	*
17. 自分一人で子どもを育てているのだと心細く感じてしまう	1.46 (0.71)	2.00 (0.41)	6.12	**
19. 私は育児以外に興味や楽しみを持っている	3.35 (0.69)	2.54 (0.52)	13.24	***

注) df = 1, 37 有意水準： *** p < .001, ** p < .01, * p < .05

年長児群では「子どもの発達」の項目の中に、「家でご飯は自分で食べている」の評定平均値は日本の方が有意に高く、ほぼ全員の被験児が「自分で食べている」と評定された。「絵本を読んでほしいとせがむ」の評定平均値は中国の方が有意に高かった (Table 3.2)。

母親の養育態度 Table 3.1 に示しているように、年中児群では、「家ではいつも数や文字などを子どもに教えている」、「夫と一緒に子育てをしてくれている」と「私は育児以外に興味や楽しみを持っている」の項目において、中国の母親の評定平均値が有意に高かった。「育児に自信がなくなる」、「自分の関心や時間を子どもにとられて視野が狭くなる」と「自分一人で子どもを育てているのだと心細く感じてしまう」の項目において、中国と日本どちらの国の母親の評定平均値も低かったが、中国の母親の方の評定平均値が日本のより有意に低かった。

Table 3.2 に示しているように、年長児群では、「子どもの将来をいつも考えている」、「家ではいつも数や文字などを子どもに教えている」、「夫と一緒に子育てをしてくれている」と「夫は家事に協力的である」の項目において、中国の母親の評定平均値が有意に高かった。「育児に自信がなくなる」の項目において、中国と日本どちらも評定平均値が低かったが、中国の母親の方の評定平均値が日本のより有意に低かった。

Table 3.2 年長児群の質問紙項目の評定平均値（標準偏差）と群差の検定

質問項目	中国	日本	F値	有意水準
子どもの発達				
5. 家でご飯は自分で食べている	3.24 (1.00)	3.81 (0.40)	9.05	**
8. 絵本を読んでほしいとせがむ	3.57 (0.51)	2.70 (0.74)	22.08	**
親の養育態度				
4. 子どもの将来をいつも考えている	3.32 (0.75)	2.89 (0.77)	4.11	*
11. 家ではいつも数や文字などを子どもに教えている	3.21 (0.63)	2.24 (0.76)	23.76	***
13. 夫と一緒に子育てをしてくれている	3.26 (0.87)	2.67 (0.78)	6.80	**
14. 育児に自信がなくなる	1.21 (0.42)	2.14 (0.76)	25.88	***
18. 夫は家事に協力的である	3.26 (0.99)	2.48 (0.83)	9.91	**

注) df = 1, 56 有意水準： *** p < .001, ** p < .01, * p < .05

3. 子どもの「心の理論」の発達と母親の養育態度の関係

本研究は「心の理論」課題での成績はきょうだい数との間に関連が薄いことを示した。そこで、きょうだい数という要因を考えず、子どもの「心の理論」の発達と親の養育態度との関係、つま

り子どもの「心の理論」課題での成績と母親が質問紙で評定した平均値の間に関連があるかどうかを検討する。「心の理論」課題を3問実施したので、それを1問ごとに正答と誤答を得点化し、得点による低群と高群を分けることにした。1問正答すれば1点、2問正答すれば2点、3問全部正答すれば3点を与える。3問すべて誤答であれば、得点は0点とする。その得点で0、1点を低群とし、2、3点を高群として被験児を高、低の2群に分けた。高群の母親の質問紙の評定平均値と、低群の母親の評定平均値を用いて、2（国：中国、日本）×2（群：低群、高群）の2要因分散分析をした。その結果、「心の理論」課題の主効果と国の主効果はそれぞれ見られたが、交互作用は見られなかった。

「心の理論」課題の主効果 「心の理論」課題の主効果について質問紙の「子どもの発達」の1項目と「母親の養育態度」の2項目で見られた（Table 4）。子どもの発達項目の「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」において、中・日両国とも母親の評定平均値の高い子どもの方が「心の理論」課題での成績が悪く、評定平均値の低い子どもの方が「心の理論」課題での成績が良いという結果が得られた。母親の養育態度項目の「子どもの好きなものなら高くても買ってあげる」、「自分の関心、時間を子どもにとられて視野が狭くなる」の2項目において、中・日両国とも母親の評定平均値の高い子どもの方が「心の理論」課題での成績が悪く、評定平均値の低い子どもの方が「心の理論」課題での成績が良いという傾向が見られた。

Table 4 「心の理論」課題の成績による低群と高群の子どもとその母親の質問紙調査の評定平均値との関係

質問項目		中	国	日	本	F値	有意水準
子どもの発達							
7. 親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む	低群	3.11	(0.83)	2.65	(0.88)	5.85	*
	高群	2.72	(0.96)	2.19	(0.62)		
母親の養育態度項目							
7. 子どもの好きなものなら高くても買ってあげる	低群	2.28	(1.07)	2.04	(0.71)	2.98	+
	高群	2.00	(0.78)	1.74	(0.66)		
16. 自分の関心、時間を子どもにとられて視野が狭くなる	低群	1.78	(0.81)	2.30	(0.63)	3.38	+
	高群	1.63	(0.93)	1.59	(0.50)		

(注) df = 1, 93 有意水準： * p < .05, + p < .10

国の主効果 「子どもの発達」項目には、中・日両国の間で13項目中8項目において差が見られた。子どもの自立心に関する項目「毎朝自分で服を着ている」と「家でご飯は自分で食べている」の2項目では、日本の評定平均値が中国のより有意に高かった。「親と一緒に出かけるとき、いつも親と手をつないでいる」、「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」という親に甘えるような項目では、中国の評定平均値が日本のより有意に高かった。また、「絵本を読んでほしいとせがむ」、「他の人が悲しんだり苦しんだりしているのを見ると、気にかけたり、同情したりする」、「「あれ、なに」などと聞いたり、指差したりするなど、知らないものやめずらしいものに興味や好奇心を示す」と「童謡などを、ほぼ完全な歌詞で歌うことができる」の項目では、中国の評定平均値が日本より有意に高かった。

「母親の養育態度」項目には、中・日両国の間で20項目中11項目において差が見られた。「育児に自信がなくなる」と「自分の関心、時間を子どもにとられて視野が狭くなる」の2項目では、中・日両国どちらの母親の評定平均値も低かったが、中国の方が、日本より有意に低かった。母親の育児意識に関する項目「子どもが育つのは楽しいことだ」、「子どもの持っている

能力をどんどん引き出したい」、「子どもの将来をいつも考えている」、「育児は有意義なことである」と「家ではいつも数字や文字などを子どもに教えている」の5項目では、中国の評定平均値が日本のより有意に高かった。夫の協力に関する項目「夫はいっしょに子育てをしてくれている」と「夫は家事に協力的である」の2項目では、また、「子どもが悪いことをした時でもきつく叱ったことがない」のような子どもを甘やかす項目、「私は育児以外に興味や楽しみを持っている」という育児以外の価値志向に関する項目において、いずれも中国の評定平均値が日本のより有意に高かった。

考 察

1. 「心の理論」のきょうだい間感染説の検討

中国の年中児、年長児群と日本の年中児、年長児のきょうだい数による3群それぞれに「心の理論」の3課題での成績において、いずれも有意差が見られなかった。本研究はPernerらの「きょうだい間感染説」やJenkins & AstingtonによるPernerらの説を支持する追試結果と一致しない結果が得られた。つまり、「心の理論」の発達がきょうだい間で伝染するというきょうだい相互作用説は支持されなかった。

「きょうだい間感染説」はPerner, Ruffman & Leekam (1994)の研究で提示され、のちJenkins & Astington (1996)によって追試され、支持された。しかし、この二つの研究にはいくつかの問題点が残されている。これは二つの研究での被験児は低年齢の子どもが含まれていたことである。Pernerらの研究では被験児は3 ; 1 - 4 ; 9歳の子どもであり、Jenkins & AstingtonによるPernerの研究の追試では、2 ; 11 - 5 ; 5歳の子どもであった。二つの研究の中で一人っ子の占める割合はどちらも3割前後であった。しかし、きょうだい間の年齢間隔から考えると、年少の子どもの中に、一般的に一人っ子の割合が高いことが考えられる。この二つの研究では一人っ子と非一人っ子の年齢を明確にしなかったため、一人っ子の中に心的表象の理解がまだできない低年齢層の子どもが片寄っていたかどうかは不明である。第二に、これらの二つの研究は「きょうだい間感染説」を支持したものの、それは上のきょうだいから下のきょうだいへの影響なのか、下にきょうだいがいることによる上のきょうだいの経験や自覚の形成なのかというきょうだい間の影響過程の検証にどちらも失敗しており、まだ探索的な段階の仮説であるように思われる。

「心の理論」課題ごとの年齢差について、中国の被験児において、年中児群より年長児群の成績が有意に良かった。年齢に伴う課題での成績が良くなっていくという点では先行研究と一致する。

一方、日本の被験児においてはこういう結果が得られなかった。これは先行研究で言う年齢に伴う課題での正答率が漸増することと一致しない。

2. 中・日両国の親の養育態度の比較

母親の養育態度について中国と日本の間多くの項目において有意な差が見られた。「子どもが育つのは楽しいことだ」、「子どもを持って自分も成長できた」、「育児は有意義なことである」などの項目では、中・日両国のどちらの母親の評定平均値も高かった。両国の母親の積

極的な育児態度が示された。

中国の「一人っ子」政策について中国の親が子どもを甘やかす養育態度を生じさせたと言う批判が長く続いている。本研究の中でもこのような傾向が見られた。「毎朝自分で服を着ている」、「家でご飯は自分で食べている」のような子どもの自立心に関する項目では、中国の子どもの評定平均値が有意に低かった。そして、「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」の評定平均値が有意に高かった。これと対応した項目で、中国の母親は「子どもが悪いことをした時でもきつく叱ったことがない」の評定平均値が日本より有意に高かった。中国の母親がたった一人しか持たない子どもを大事に育て、必要以上に子どもに世話をするような養育態度は子どもの自立心の発達を妨げることを示唆する。また、「家ではいつも数や文字などを子どもに教えている」において、中国の母親の評定平均値が有意に高かった。本研究の実験に参加した中国の母親の世代は文化大革命の動乱で学校が閉鎖され、勉強ができなかった時代を経験した人が多くいる。母親たちは自分たちが勉強できなかった分を子どもに勉強させたい気持ちから、そして、たった一人っ子の子どもに対する期待から、子どもの早期教育に熱意を注いでいることが考えられる。

日本の父親の家事や子育てへの協力度が低いという調査結果が得られている（許，1995）。本研究では父親の協力度をたずねる項目において、中国の評定平均値が日本より有意に高かったが、日本の評定平均値から父親の子育てへの協力度が高まってきたことがうかがわれる。

一方、中・日両国の母親は育児に積極的な姿勢を見せながら、「自分の生きがいは育児だけではない」、「私は育児以外に興味や楽しみを持っている」と育児以外の個人の価値志向をも求めていることが表われた。特に日本の母親たちは、従来のように家にとじこもるのではなく、社会に出て、新しいライフスタイルを求めるようになった。母親の中に仕事をもち、自立を目指し、夫婦間の対等感覚が強くなっている人が増えてきている（柏木・高橋，1995）。

3. 親の養育態度と子どもの「心の理論」発達の関係

「心の理論」課題の主効果 「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」、「子どもの好きなものなら高くても買ってあげる」において、中・日両国ともに評定平均値の高い子どもの方が「心の理論」課題での成績が悪く、評定平均値の低い子どもの方が「心の理論」課題での成績が良かった。甘やかされた子どもは「心の理論」の発達が妨げられることを示唆する。また、「自分の関心、時間を子どもにとられて視野が狭くなる」の項目の評定平均値が高ければ、子どもの「心の理論」課題での成績が悪い傾向が見られた。母親の子どもに対する過剰な養育意識は子どもの「心の理論」の発達に悪い影響を与えるように見られる。

国の主効果 中・日両国の間で「子どもの発達」、そして「母親の養育態度」において、多くの項目で有意差が見られた。中国の母親がたった一人しか持たない子どもを大事に育て、必要以上に子どもに世話をするため、子どもの自立心の発達が妨げられていることが示唆された。中国の母親は子どもを甘やかして育てている傾向が強いことは日本の母親とは対照的である。

子どもの「心の理論」の発達と母親の養育態度との関係はまだ研究されていない。しかし、子どもの多くの発達はいつも関わっている母親の影響を受けることが多い。本研究では、「心の理論」の発達と母親の養育態度との関係を調査したところ、「親に少しきつく叱られると、すぐふさぎ込む」、「子どもの好きなものなら高くても買ってあげる」において、中・日両国ともに評定平均値の高い子どもの方が「心の理論」課題での成績が悪く、評定平均値の低い子どもの方が

「心の理論」課題での成績が良いという傾向が見られた。これは甘やかされた子どもは「心の理論」の発達が妨げられることを示唆する。また、本研究では母親の「自分の関心、時間を子どもにとられて視野が狭くなる」の項目の評定平均値が高ければ、子どもの「心の理論」課題での成績が悪い傾向が見られた。母親の中に、子どもは世話される方で、母親は世話する方であるという観念がまだ存在している。何もかも世話をする母親は育児のストレスを感じるが、一方、何もかも世話され、教えられる子どもは他者の心への理解や推測は必要としなくなるので、「心の理論」課題のような他者の心的表象への理解ができなくなると考えられる。

4. 本研究の問題点と今後の課題

本研究では、「心の理論」の発達に及ぼすきょうだいの影響と母親の養育態度の影響を中国と日本の比較文化的調査を通じて検証する試みを行なった。従来から指摘されているように、この種の研究の難しさは少なくとも2点ある。

第1は、きょうだい研究の場合、きょうだいのパターン（上下関係と性別）を考えると1つの条件に含まれる人数にばらつきが生じ、被験児数の少ない条件が生じやすいという問題である。本研究でも3人きょうだい及びそれ以上のきょうだい数を持つ被験児が少なかった。きょうだい間感染説を検証するためには被験児がきょうだいの何番日かまで考慮する必要が出てくることを考えると、ある程度の大量観察が必要となる。

第2には、比較文化研究につきものの被験者のサンプリングの問題である。本研究では、上海市と兵庫県下の都市を選んだ。しかし、質問紙項目の因子構造での中国と日本との大きな差があったことは、質問項目の問題を加えてサンプリングの問題の難しさが示された。

最後に、本研究では母親の過剰な、あるいは過保護的な養育態度は子どもの「心の理論」の発達を妨げるという傾向が見られた。しかし、このような傾向は日本においても見られているので、中国の一人っ子政策だけが子どもの養育に過剰に意識させる結果をもたらしていると言い切ることができない。また、一人っ子政策が子どもの心の発達に悪影響を及ぼすという関連性も断定できない。母親の過剰な養育態度は子どもの「心の理論」の発達を妨げるという傾向は一人っ子政策そのものの避けられない弊害ではなく、親の自覚で克服可能なものであろう。一人っ子の心の発達の問題点を明らかにしていくことが、そのような親の自覚に貢献しうるのであろう。

引用文献

- 東 洋・柏木恵子・R. D. ヘス 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- Chen, K. 1985 A preliminary study of the collective orientation of the only child. *Journal of Psychology*, 3, 264-269.
- Falbo, T., & Poston, D. L. 1993 The academic, personality, and physical outcomes of only children in China. *Child Development*, 64, 18-35.
- Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. 1986 Children's understanding of falsebelief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, 57, 567-582.
- Jenkins, J. M., & Astington, J. W. 1996 Cognitive factors and family structure associated with theory of mind development in young children. *Developmental Psychology*, 32, 70-78.
- Jiao, S., Ji, G. & Jing, Q. 1986 Comparative study of behavioral qualities of only children and sibling children. *Child Development*, 7, 357-361.

- 荊 其誠 1989 中国における心理学の最近の発展 心理学研究, 60, 117-121.
- 柏木恵子・高橋恵子(編著) 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- 許 佳美 1995 母親の育児態度と子どもの発達——中日比較調査 関西学院大学臨床教育心理学研究, 21, 147-158.
- 三宅和夫 1991 乳幼児の人格形成と母子関係 東京大学出版会
- 莫 邦富 1992 独生子女——爆発する中国人口最新レポート 河出書房新社
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- Perner, J., Leekam, S., & Wimmer, H. 1987 Three-year-olds' difficulty with false belief: The case for a conceptual deficit. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 125-137.
- Perner, J., Ruffman, T., & Leekam, S. 1994 Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development*, 65, 1228-1238.
- Premack, D., & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 1, 515-526.
- 若林敬子 1994 中国人口超大国のゆくえ 岩波書店
- Wimmer, H., & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs: Representations and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13, 103-128.

付記

本論文は京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(1997年度)に加筆修正したものです。本論文の作成にあたりご指導いただきました子安増生先生、吉川左紀子先生に心から感謝いたします。また、本研究の実施にあたり、ご協力いただきました上海市と兵庫県の幼稚園や保育所の先生方、ならびに幼児の皆様、幼児たちのお母さん方に厚く御礼申し上げます。

(博士後期課程2回生、教育心理学講座)